

死者供養文化の深層

代表者・司会 池上良正

コメンテータ 中村生雄

ヒトガミの誕生

——日本列島における死者供養の淵源——

佐藤 弘 夫

日本列島では、縄文時代には靈威をもつカミは土偶といった具象的なモノとして表現されたが、弥生時代になるとカミそのものの表現は姿を消し、代わってカミの象徴としての高床の家・樹木や神を祀るシャーマンが描かれるようになる。これらは、その時期に進行するカミの超越化に対応する現象と捉えることができる。その中間の縄文後期・晩期には、あたかも他の何ものかに祈りを捧げるような合掌土偶が作られていることも注目される。

縄文時代の後期は、死者の身体から自立した靈魂の觀念が成長する時代でもあった。ただし、同じ時代を生きた人物の死靈がカミにまで上昇するためには、その人間が共同体の構成員総体にとって特別の存在である必要があった。巨大な墳墓が造られた古墳時代には、被葬者をカミとする見方はすでに存在したと考えられる。前方後円墳は、カミが山に棲むという当時の觀念を前提として、一人の人物の靈を共同体の守護神カミに祭

り上げるとともに、カミの宿る地を人工的に造り出そうとする仕掛けだった。その祭祀は、直接墳丘礼拝するという形式ではなく、おそらく当時一般的に行われていたであろう、その都度カミを勧請する祀りの形式であり、集落の中心部の広場ないしは墳丘を望む場所に依代を設けて、カミとなった祖靈を勧請して行うという方法だったと考えられる。前方後円墳祭祀は古墳上では継続されなかったが、場所を変えて行われていたのである。

ただし首長の靈を確実にカミにまで上昇させる方法は、前方後円墳の時代ではまだシステムとして確立しておらず、諸地域の首長靈との質的な差別化もなされていなかった。そこに代々の首長ごとにその試みが反復され、墳丘はどこまでも巨大化していく必然性があつた。王の靈をカミに祭り上げるシステムを大王家が独占するとともに、それが安定した機能を發揮するようになるのは、神祇祭祀の作法や陵墓制などの制度が完成する七世紀末の天武・持統朝以降の出来事だった。この段階では、もはや富と権力を蕩尽しての一代ごとの大規模な墓の造成は必要だった。

王はみずからの権力と権威の延長としてカミになるのではなく、外部の回路を介在したシステムを通じてカミに祭り上げられる存在と化したのである。

七世紀末に遡る死者をカミとして祀る儀礼は、そのまま現代にまでつながるものではない。天皇靈の信仰はその基盤であつた古代国家の解体にともなつて事実上廃絶し、死者を神に祀る伝統はもっぱら御靈信仰として継承された。その御靈も中世に

入ると仏教の本地―垂迹のコスモロジーに組み込まれて合理的性格を強め、彼岸の仏の垂迹に救済者としての性格を強めていく。

中世までは神になることのできる人物は、生前に特別の地位にあつたり、あるいは大衆に強い印象を残したりした人々だった。それに対して、近世になるとはじめて一般人がカミとなる信仰が登場する。各地に残る人柱伝承や義民伝承は、みずからの意志によって身を犠牲にした人物をカミとして顕彰するシステムであり、中世の御霊信仰とははつきりとした断絶があった。湯殿山などの即身仏信仰も同様だった。

そうした時代風潮のなかで、国学や垂加神道の学者たちは、仏教・朱子学いずれの教説とも異なる、日本固有の世界観に立脚する独自の安心論の構築をめざした。その結果誕生した教説が、生前に神としての天皇に忠誠を尽くすことによって、死後は自身も神となつて八百万の神の末席に列なり、永く国土と天皇を守護することができるという主張だった。忠君の霊魂が天皇の藩屏となつて永遠にこの国土に留まるとする、招魂社を経て靖国の論理まで直結する論理が、ここによりやく成立するのである。

石塔の思想史

――五輪塔を中心に――

松尾 剛次

本報告の狙いは、塔高二メートルを超える巨大五輪塔に注目して、五輪塔が制作された宗教思想史を明らかにすることにある。日本中世は、石塔の世紀と呼べるほど、数多くの石塔が建立された。板碑、宝篋印塔、五輪塔などが全国各地に制作され、現在も残存している。とくに、中世末には、数多くの小さな墓塔が制作されていた。

本報告では、鎌倉時代後・末期、すなわち十三世紀末から十四世紀初頭に制作された五輪塔に注目する。近年、中世考古学研究の深まりにともない、全国の石塔が収集され、それらを制作した職人集団（石工集団）、教団との関係などについての研究が大いに進展している。しかしながら、それらを生み出した人々の石塔に託した思いなど、いわば石塔の宗教思想史については、近年、千々石到、菊池大樹、佐藤弘夫らの優れた研究があるにしても、緒についたばかりといえよう。本報告では、宗教思想史研究の素材として中世の石塔、とくに五輪石塔を取り上げる。五輪石塔というのは、石を五つ積んだ墓塔である。本報告において、石塔の中でも五輪石塔に注目するのは、従来、佐藤弘夫の思想史的研究に見られるように、板碑は注目されてきたのに対して、五輪石塔は、さほど注目されてこなかったからである。